

【2021年度 学生交流委員会 事業報告】(案)

学生交流委員会

委員長校 : 神戸親和女子大学

副委員長校: 甲南大学

委員校: 芦屋大学、関西国際大学、関西学院大学、聖和短期大学、甲南女子大学、神戸大学、神戸海星女子学院大学、神戸学院大学、神戸市看護大学、神戸松蔭女子学院大学、神戸女学院大学、神戸女子大学、神戸女子短期大学、神戸常盤大学、神戸常盤大学短期大学部、頌栄短期大学、園田学園女子大学、園田学園女子大学短期大学部、姫路大学、姫路獨協大学、兵庫大学、兵庫大学短期大学部、兵庫県立大学

計25校

<目的>

学生交流委員会では、学生プロジェクト事業、学生災害ボランティア・ネットワーク事業の2つの事業により、コンソ加盟大学の学生に対して、他大学の学生との交流、自治体・企業など地域社会との交流、被災地との交流、社会人との交流等の場を提供することにより、参加した学生に様々な交流を促し、この経験が大学4年間の学生生活に資するよう、各種プログラムの内容の充実を図り、実施したいと考える。

<内容>

学生プロジェクト事業は子どもや保護者、他大学との交流事業として、「キッズフェスティバル」を実施する。学生災害ボランティア・ネットワーク事業は、阪神・淡路大震災を経験した地域として、学生が日常的な地域福祉や社会支援と災害時およびその後の災害支援とが連続性を持っていることを理解し、被災地での支援活動に取り組むことや復興支援の実情および今後の災害に備えた減災への取組みを学ぶことにより、日頃から主体性・自発性にボランティアや社会活動に取り組む姿勢を身につけ、被災地支援・復興支援や今後の災害に備えることを目的とする。また事業の実施体制として、ユニット制での実施を継続して実施する。上記2事業に基づく2ユニットのいずれかに全委員校が参加し、ユニットごとに企画立案から多くの加盟校が主体的に参画することにより、学生交流の実質化に繋げる。

<期待される効果>

学生交流委員会では、この2つの事業により、コンソ加盟大学の学生に対して、他大学の学生との交流、自治体・企業など地域社会との交流、被災地との交流の場を提供することができる。また参加した学生に様々な交流を促すことにより、学生自らが他大学の学生と協働し企画を実現することによる能力向上の機会を提供する。

実施プログラム名称		予算額
①	学生プロジェクト事業「キッズフェスティバル」	800,000円
②	学生災害ボランティア・ネットワーク事業	2,400,000円

【2021年度 学生交流委員会 事業報告①】

課題	地域で活躍できる人材の育成(キッズフェスティバル)			
達成目標	リーダー(企画・運営を担える人材)の育成:50名 / 年			
課題を解決する取組概要	<p>(取組1)地域(子どもやその保護者等)との交流を図るイベントを企画・運営し、異世代交流の体験を通じた幅広いコミュニケーション力、前に踏み出す力(アクション)、考え抜く力(シンキング)、チームで働く力(チームワーク)を、実践によって身につけさせ、地域で活躍できる人材を育成する。</p> <p>参加学生には、地域の子どもの状況やその背景についても学ぶ機会を提供することにより、地域における子どもの現状(少子化等)と課題を踏まえた取り組みに繋げる。</p> <p>※「リーダー(企画・運営を担える人材)」 イベントの参加学生のうち、実行委員として当該イベントに関する企画、各種調整・交渉、運営等を担った学生。</p>			
活動指標	参加団体数:15団体程度 / 年 参加者(親子)数 :500名 / 年			
内容 (結果)	<p>・実施内容 昨年度に続き、コロナ禍での進行となった。実行委員会はZoomを基本としたが、会場見学会と「キッズフェスティバル」開催後の最終回は対面で行うこととし、学生リーダーの強化・充実に資するための「リーダー養成のための講演」についても、その2回で実施することとした。 会場のこべっこランドは、昨年度に引き続き入場制限があり、対面は参加団体を絞らざるを得なかった。参加団体を増やせないため、合同ブースを2ブース設け、ブース数を2つ減らし6ブースにし、参加8団体で行った。 会場は7Fのこべっこホールのみとし、時間も午前1時間、午後1時間30分に短縮、さらに入場者は子ども、おとな全員で50名までとし、午前・午後完全入替制とした。各団体の入場者も5名までを徹底、会場内同時入場者は最大許可数の100名を遵守して行った。 加えて、昨年と同様に動画のみの参加も募った。会場参加は、動画参加も条件とし、会場参加の8団体に、動画のみ参加の5団体を加えた合計13団体の参加となった。1団体3分程度としたが、各団体色々工夫し、どれも楽しい内容となった。</p> <p>・具体的な進め方など 参加大学の運営スタッフ(3名程度選出)からなる実行委員会を編成し、予定の4回の実行委員会を行った。欠席団体については、Zoomでフォローするようにした。 各団体とスムーズな連絡が取り合えるようLINEの活用によって、スムーズな連絡を取り合うことができた。 「リーダー養成のための講演」は、昨年度に引き続いて大島剛教授(神戸親和女子大学)による「子どもたちとのつきあい方」の講演を2回行い、地域の状況やその背景についても学ぶ機会を提供することで、地域における子どもの現状(少子化等)と課題を踏まえた取り組みにつながるよう願っている。</p> <p>【結果】 日 時 2021年12月5日(日) 午前の部 10:00~11:00 午後の部 12:30~14:00 場 所 こべっこランド 7F(神戸市総合児童センター) 入場者 (午前の部) 子ども 36、おとな 32、計 68名 (午後の部) 子ども 42、おとな 34、計 76名 (全体) 子ども 78、おとな 66、計 144名</p>			
新しい試み等 (事業計画に記載)				
事業収支	収入	支出	収支	備考
	800,000円	310,919円	489,081円	

自己評価	【対到達目標】	4	【対継続性】	3
	<p>「キッズフェスティバル」のこべっこランドでの開催が、6年目となった。第1回を、王子動物園の動物科学資料館(動物園ホール)で開催して以来、第2回以降続いている。</p> <p>昨年度に続いてコロナ禍での準備・本番で、苦労が多かった。様々な条件の中で思うようにできず、できることをやって行くことの大切さを改めて思い知らされた気がしている。学生たちは、本当によくやってくれた。学生リーダーの強化・育成は、想像以上に効果があったと自負している。加えて、学生間交流、大学間交流も、とても充実していたように感じている。2年目を迎えた動画作成もレベルが上がって来ていて、学生たちの取り組みにはいつも感心させられる。</p>			
■自己評価基準 (対到達目標)	4: 当初計画を上回って達成 3: 当初計画を達成 2: 当初計画をやや下回った 1: 当初計画を下回った	■自己評価基準 (対継続性)	4: 本プログラムは継続すべき 3: 本プログラムは継続しても良い 2: 本プログラムの継続には改善が必要 1: 本プログラムは中止すべき	
理事会からの改善提案 (次年度事業計画に反映)	<p>・新型コロナウイルスにおける地域交流・貢献イベントを、徹底した感染症対策や動画での参画など、新しいスタイルを築き上げた意義のある活動である。</p> <p>・来年度以降も、学生リーダー養成、学びの実践、学生間交流、地域貢献の視点を重視し、満足度の高いプログラムの実行を検討して頂きたい。</p>			

【2021年度 学生交流委員会 事業報告②】

課題	地域の防災等を担う人材の育成－学生災害ボランティア・ネットワーク事業			
達成目標	「ひょうご災害・防災リーダー」認定学生数:50名(2021年度までの延べ数)			
課題を解決する 取組概要	<p>阪神・淡路大震災の経験を有する兵庫県で地域の防災等を担う人材養成プログラムを実施する。</p> <p>コンソ加盟大学の学生と県内外の各団体が連携し、阪神淡路大震災の経験、教訓を学ぶ場の提供や東日本大震災や岡山豪雨災害等の現場での実際の支援活動に取り組み、被災地の復興支援の体験やそこから派生する防災への取り組みを学び、自主的且つ自発的に活動に取り組む学生を育成するとともに、災害・防災リーダーを養成する。</p> <p>・阪神淡路大震災とその後の復興の過程に関する学びと実質的なボランティア研修を踏まえ、現場のニーズに即したネットワーク活動を企画・実施し得る能力を身につける。</p> <p>・宮城県、岡山県等でのネットワーク活動の実施により、時間経過に伴う被災地のニーズの変化や復興の過程を学ぶ。</p> <p>・震災直後やその後の復興の過程を学ぶとともに、今後の防災・減災に向けて、何ができるのかを考え、実践に移すことができる「ひょうご災害・防災リーダー」を養成する。</p> <p>※「ひょうご災害・防災リーダー」 2年以上継続して活動に取り組み、リーダー研修の受講及び各グループ活動での実践的取組みを最後まで遂行した学生。</p>			
活動指標	プログラム参加学生数:250名(2021年度までの延べ数)			
内容 (結果)	<p>今年度もコロナ禍であったため、例年の4月の募集開始を6月に延期し対応した。募集の結果26名の学生が当活動に参加し、継続してこの活動に参加している学生スタッフ2名と併せて計28名の学生が活動に取り組んだ。またこの事業は学生交流委員会だけではなく、神戸市社会福祉協議会、日本財団学生ボランティアセンターとの3者共催で活動を進めてきた。</p> <p>今年度は研修内容も充実させ、各共催者の企画立案により、5回の研修会を開催した。どの研修もこの11年間の活動の蓄積から、より現場の活動の理解を深める実質的な研修企画を心掛けるとともに、自分自身で考え、チーム内で話し合い、そして実践に繋げるというプロセスを重視してきた。この前半の研修会で、阪神・淡路大震災の経験、被災地支援、復興支援、災害と福祉の関連について学ぶ機会を提供することができたと思う。</p> <p>また4つのチーム(宮城、熊本、岡山、長野)に分かれて、前年度に続き、活動を展開してきたが、現地の関係者との関係も昨年の活動から構築できていたことから、学生たちも円滑にコミュニケーションを図ることができていた。10月以降は、現地のニーズを踏まえ、活動を展開するフェーズにと位置づけ取り組んだ。宮城チームは復興公営住宅集会所での茶話会にオンラインで参加し、兵庫の観光紹介を自分たちで撮影した動画で披露するなど住民の皆さんとコミュニケーションを図ることができていた。長野チームは、長野市内の消防団の方にお話を伺い、長野の災害やこれからの防災について学ぶとともに、そこで得た知識を長田区内の学童施設で子供たちに伝える活動等を行った。岡山チームは12月末に現地で活動を実施し、現地関係者と交流を重ね、「真備災害すろく」の作成に取り組んだ。熊本チームは、仮設住宅のオンライン茶話会に参加し、現地の方と交流を重ね、当活動を伝える冊子を作成し、現地関係者に配付する。</p> <p>1月23日の振り返りの会・修了認定式では、活動途中のチームもあったが、各チームの活動結果やその活動を企画立案するまでのプロセスについて、改めて振り返り、この活動で得た経験を今後、どう活かすのかを自分自身の言葉で語ってもらう機会となった。</p>			
新しい試み等 (事業計画に記載)	・これまでの9年間、対面での活動を行ってきたが、前年度は新型コロナのため、オンラインのみでの活動となった。今年度は、対面の利点、オンラインの利点を併せたハイブリッドによる活動を志向し、当事業に取り組むたい。			
事業収支	収入	支出	収支	備考
	2,400,000円	1,317,912円	1,082,088円	

自己評価	【対到達目標】	3	【対継続性】	3
	今年度も昨年に続き、宮城、熊本、岡山、長野の4カ所で、現地の関係者とともに連携した活動を実施することができている。、研修も対面・オンラインどちらでも対応可能な設定を行うなど工夫し、充実させることができた。新型コロナウイルス等の影響は受けたが、各チームとも、現地関係者との打ち合わせを重ね、工夫を行い、現地の方に喜んでいただける活動に取り組むことができた。			
■自己評価基準 (対到達目標)	4:当初計画を上回って達成 3:当初計画を達成 2:当初計画をやや下回った 1:当初計画を下回った	■自己評価基準 (対継続性)	4:本プログラムは継続すべき 3:本プログラムは継続しても良い 2:本プログラムの継続には改善が必要 1:本プログラムは中止すべき	
理事会からの 改善提案 (次年度事業計画 に反映)	<p>・コンソの基幹事業の1つとして、新型コロナ禍の中、安全を第一にオンラインボランティア活動という新たな領域を作り上げた実績は大きい。</p> <p>・今後は、11年間のプログラム運営で得たノウハウを、次のステージでの展開に活かし、地域や学生間の連携を通じて、地域社会でリーダーとなる学生の育成に繋がるプログラムの実行を検討していただきたい。</p>			